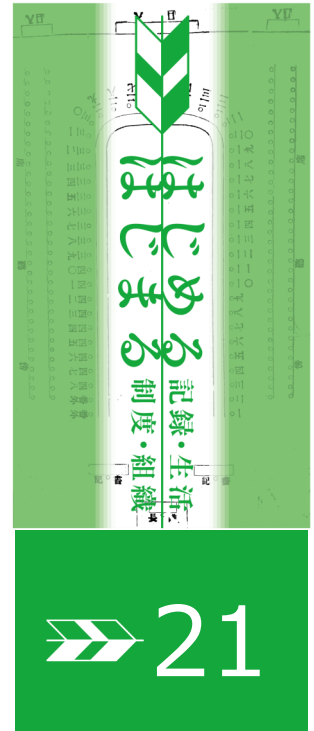


「密局日乗」安永3年10月28日条（毛利家文庫19日記18〈129の13〉）



組織 ①

萩藩密用方、はじまる

《萩藩密用方の設置》

萩藩の密用方（みつようかた）は、安永3年(1774)10/28、7代藩主重就の時に新設された役所です。初代頭人（密用方のトップ）となった藩士中山又八郎は、10年前の明和元年(1764)8月から仕事を始めており、その活動が評価されこの年正式な役所としてスタートした形です（上写真参照）。

密用方は以後幕末まで活動します。文政6年(1823)以降編纂を続けた「毛利三代実録」が有名です（シート1参照）。そのほか藩主・藩中枢の指示で作成した記録類が毛利家文庫に数多く残ります。「密局日乗」（毛利家文庫19日記18～20 134冊）という密用方の日記もあります。後期藩政を担った村田清風、坪井九右衛門、棕梨藤太などが、密用方業務の経験者です。

《密用方の業務》

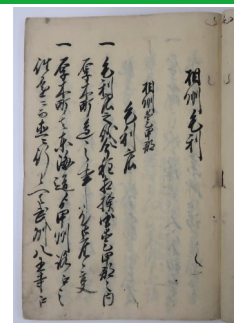
密用方は、重要な先例や儀式、毛利家の系図・由緒などの調査を担当したと説明されます（『もりのしげり』）。文化事業担当役所としてイメージしがちですが、藩政期、先例、重要儀式のあり方、歴史・由緒、あるいは過去の考え方を調べ、まとめ、その記録を作成すること、それらの仕事は、重要課題に直面する藩がその方針を決める上で重要な役割を果たしました。

重就時代、密用方は、必要であれば江戸・国元いずれの役所の文書記録でも閲覧が認められました。こうした権限を許されたのは密用方だけです。これが先例となり、以後密用方は、さまざまな調査、記録作成事業を遂行できたのです。

《重就と密用方》

設立当初の密用方は、特に藩主重就の意向を受けた業務を担当しています。それは藩内における重就の政治的立場を強化する上で重要なものでした。

支藩長府藩から本藩の萩藩を継いだ



中山又八郎による諸国調査

中山又八郎は諸国での調査も行いました。明和8年3～6月には、安芸国吉田、厳島、伊勢、高野山、出雲などの寺社で文書や棟札を調査したり、名所旧蹟を訪れています。毛利家との関係・由緒を把握するためでした。その成果に毛利家文庫30地誌12「芸雲旧蹟記」があります。また安永4～5年には毛利氏の故地、毛利庄（相模国愛甲郡厚木近辺）も調査しています（同30地誌5「毛利庄」）。

重就にとり、萩藩および毛利家の歴史、先例や儀式のありようや、家臣の由緒・履歴など過去の情報を把握することは、並み居る譜代家臣たちに優位を保つ上で必要なことでした。重就の目となり過去の正確な情報をつかむこと、時に重就の声となり彼の主張を示すこと、それが成立期の密用方に特に求められた役割でした。

《初代頭人中山又八郎》

密用方初代頭人・中山又八郎は、明倫館2代目学頭山県周南の5男で、のち藩士中山家の養子となりました。彼は明和元年8月から重就の命じる記録作成や調査事業を担当しています。25才の時でした。その仕事ぶりが評価されて密用方設置となり、頭人に任命されたのです。精力的に仕事をこなした又八郎でしたが、天明6年(1786)9月4日、48才で亡くなりました。

明和元年8月から天明6年9月までの間、又八郎が担当した仕事のいくつかを紹介します。

①「御教戒」 *毛利家文庫3公統123

「御教戒」は、藩祖元就、および隆元・輝元らの文書から教訓とすべきことばをまとめたものです。毛利家の御什書類、閲録・譜録の収録文書などを又八郎が網羅的に調査し、ことばを選び、それを藩儒山根華陽が校訂し、前書を記しました。10の徳目で構成されています。重就が自らの指針とするため編纂を命じたものです。明和4年9月に完成しています。

②元就200回忌法要関係業務

③輝元150回忌法要関係業務

* 同46吉凶2・9～11等

明和7年(1770)6月7日～14日、萩城内の洞春寺において毛利元就の200回忌法要が、安永3年(1774)4/24～27、萩天樹院で輝元の150回忌法要が営まれます。いずれも前回（元就150回忌、輝元100回忌）と比べ大規模に行われた点が特徴です。法

要に先立ち又八郎には、a 過去の記録を参考に儀式の先例調査、b 参列を希望する家臣・領民の由緒、元就・輝元との関係を調査し、法要への参列に関する判断書を作成、などが命じられ、法要中は、c 法要実務を裏方で取り仕切りを、法要終了後は、d 記録のとりまとめ、を担当しています。

重就は法要を大規模に行い、多くの家臣・領民を参列させることにより、藩主である自らへの、また毛利家への求心力を高める意図があったと考えられます。又八郎はその実現のための仕事をこなしました。

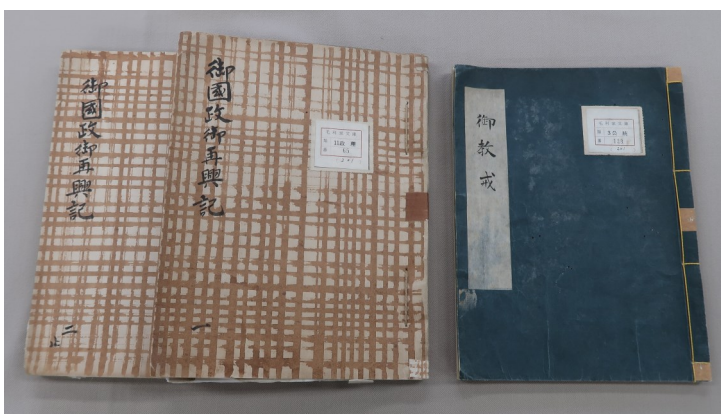
④武芸諸芸御取立御内用 *同15祭祀78

重就は、武芸諸芸の修練に務めている者など「諸芸出精者」を調査させ、安永6年(1777)3月13日、明倫館において優秀者124名に褒賞を与えました。重就の文教政策の一環と位置付けられます。又八郎は「諸芸出精者」の調査、褒賞授与の判断書作成、褒賞儀式の準備などを担当し、ここでも重就の政策実現に尽力しています。

⑤「御国政再興記」 *同11政理64～66

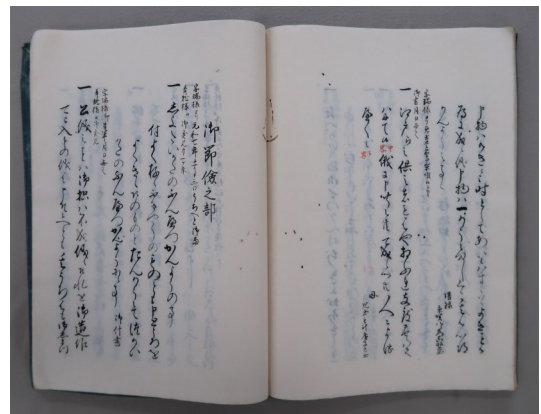
「御国政再興記」は、重就の治績をまとめ、藩政・財政立て直しに貢献したことを力説する書です。重就の政策、政治へは家臣たちの批判も強く、重就はみずからの政策意図、正当性を主張し、批判へ反論する必要がありました。本書はそのためのものでした。安永8年(1779)2月に「第一」、天明2年(1782)8月に「第二」が完成。「第一」は御宝蔵に収められたほか、諸役所に写しが配布されました。

本書作成にも密用方が関わりました。「第一」は重就側近の重臣高洲就忠が草案を作成、当役国司が奥書を記したもので、密用方は清書作業を担当しました。一方、重就の自己弁護的性格がより強い内容の「第二」は、密用方が主に編纂を担当しています。「第二」編纂に関し密用方は、重就の声となって治世の正当性を主張し、批判へ反論する、その役割を担ったのです。



左:「御国政再興記」一・二

右:「御教戒」



「御教戒」の記載(「御節儉之部」)